課題別学習を中心としたシステム手帳作りとその活用

― のびのび手帳は僕の宝物 ―

岡山県健康の森学園養護学校　教諭　青山　茂行
shigeyuki_aoyama@pref.okayama.jp

キーワード：特別支援学校，スケジュール管理，視覚支援，システム手帳

１．はじめに

小学部４年生のＡ児に関する実践。学習障害に関する幾つかの特性がある。学校生活を送る上で友達や教師とのトラブルが多く、彼に対する支援のあり方が課題となっていた。４年生の４月から始めた「のびのび手帳」の取り組みは、落ち着いた学校生活を送るための支援の要となり、友達や教師、保護者とのコミュニケーションツールへと発展させることができた。本発表ではこの「のびのび手帳」に関する実践の様子を紹介する。

２．Ａ児について

聴覚優位な特性があり、教師との会話は生活上問題の無いレベルで出来るので、会話によるコミュニケーションが十分出来るように見える。興味のあることや直接的に体験したことに関する記憶力は優れており、細かなところまで、教師の質問に答える形で説明することができる。その結果、言葉による指示だけで教師の意図が伝わると思われがちだが、実際には指導が困難な場面が多くある。聞いて覚えた新しい言葉も会話の中で使うことができるが、実際は意味を取り違えたり、意味が分からないまま使っていることも多い。大人とのスムーズな会話ができる反面、その内容の理解度は低く、大きなギャップがある。教師が理解しているつもりで対応すると、「指示が聞けない」「やる気が無い」と見えてしまう。その一方、視覚からの情報は記憶に結びつきやすく、場面と事柄を結びつけ、ある程度情報を整理し記憶し、活用することができる。

３．のびのび手帳の取り組み

３．１ システム手帳の活用

Ａ児の特性から、視覚支援が有用であり、聴覚と視覚のバランスを重視したコミュニケーションの必要性を感じた。教師からＡ児へ伝えたいことを文字や写真、イラストを使い、視覚的に示し、教師と一緒に確認する、そのためのツールとして、システム手帳を利用した。必要に応じて、簡単に中身を増やしたり、入れ替えることができるので、その後の発展や彼の手帳に関する興味の持続が可能だと考えた。サイズについてはオリジナルを含め、幾つか試したが、手に持って携帯しやすく、彼が記入しやすいサイズを考え、バイブルサイズとした。名称にはこだわり、自分だけの特別な手帳と感じてもらえるように「のびのび手帳」とした。中には「①ぎょうじ」「②せいかつ」「③がくしゅう」「④かてい」「⑤おたのしみ」「⑥スケジュール」「⑦メモ」のインデックスを設け、教師が伝えたい事柄を「きまり」ではなく「コツ」として肯定的な表現を用いてまとめ、ページを作成し一冊に綴じた。教師からＡ児へ、情報を伝える窓口としての役割を担うので、できるだけシンプルに、わかりやすく、親しみやすいものになるように配慮している。

写真１　手帳の表紙

３．２ のびのび手帳

（１） 内容

①ぎょうじ	遠足や交流会、運動会等、行事についてのスケジュールやコツをまとめて、事前に提示。最新のものだけになるように随時差し替えている。
②せいかつ	朝の会や帰りの会、給食、掃除等、学校生活を送る上でのコツをまとめている。
③がくしゅう	課題別学習の学習内容やコツをまとめている。このページを見れば自習もできる。
④かてい	家庭での約束、宿題のやり方についてまとめている。
⑤おたのしみ	好きなキャラクターやテレビ番組についてのページ。興味に応じて随時更新している。もらった手紙も綴じている。手帳への興味持続の要になっている。
⑥スケジュール	１ページ１週間形式のスケジュールをＡ児が自分で書いて利用している。１００円均一で見つけたバイブルサイズのノートを使用。
⑦メモ	白紙のメモ用紙。Ａ児が自由に使ったり、その場で教師がＡ児への支援に使ったりする。

（２） 課題別学習での活用方法

本校では教科領域を合わせた学習として「課題別学習」の時間を設けている。個別に課題を用意し、主に国語と算数の学習に取り組んでいる。Ａ児はこの学習の中に「のびのび手帳」の時間を設け、新しいページやスケジュールの確認、手帳の整理をしている。教師が新しいページを作ると課題別学習の時間に提示し、Ａ児が自分で手帳に綴じ、自分で読む。継続して取り組んでいることや、確認させたいことがあれば、そのページを繰り返し読む。また必要に応じて、行事等での活用、寄宿舎や家庭でも活用している。

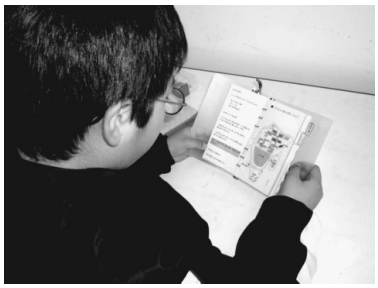

写真２　課題別学習の様子

３．３ 活用の様子

（１） Ａ児の活用

のびのび手帳を手にしたＡ児は、巻末に設けた「おたのしみ」のページを気に入り、宝物のように持ち歩いた。休み時間には度々読み返し、毎日の課題別学習の時間にも忘れることなく持参することができた。教師の言葉でのアドバイスや注意にはあまり耳を傾けることができなかったが、手帳の中に書いてあることはすぐに覚えて実践することができ、その効果の大きさを感じた。学校生活も徐々に落ち着きを取り戻し、トラブルも減少した。自分から教師へ関わろうとする場面も増えた。手帳の扱いになれると、中身を更新して新たな支援を始めても、特に説明をすることがなくてもスムーズに応じることができた。手帳を友達や家族、他の教師に見せ、コミュニケーションのツールとしての利用も見られた。休憩時間にページをめくりながら、過去の学習を振り返っている場面もあった。ポートフォリオ評価的な側面も感じる。Ａ児は教師の手帳作りの様子に「自分もしてみたい」「友達や教師に作ってあげたい」と感じるようになり、パソコンやインターネットの使い方の学習も始めた。

（２） 教師の活用

手帳のページ作りには、Ａ児の実態や課題をしっかりと考えることが必要とされる。作成の過程では関係する教師が試行錯誤し、児童の実態や課題に迫り、結果として、教師同士が深く連携することができた。ページ作りが支援であり、教材研究、関係する教師の打ち合わせとなっている。また、読み返すことにより、教師自身が学習の様子や支援のあり方を振り返ることもできている。出張等で普段関わっていない教師が指導にあたるときにも、手帳を見てもらうことにより、ある程度の様子を掴むことが出来ている。サポートブックとしての活用も生まれている。

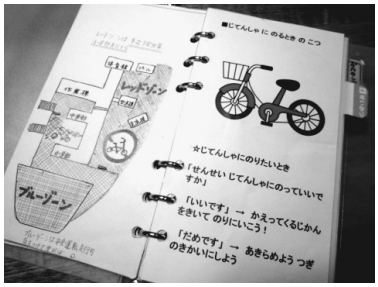

写真３　教師作成のページ

（３） 保護者の活用

学校での活用の成果は、保護者によって家庭でも活かしてもらうことが出来ている。のびのび手帳は週末は家庭に持ち帰り、家庭生活のルールを必要に応じてページにまとめ手帳に綴じて活用しもらい、親子のコミュニケーションツールにもなっている。また、Ａ児の保護者にも手帳を見ることによって、学校での学習の様子を詳しく把握することができるとの感想も頂いた。

４．成果と今後の展望

のびのび手帳の取り組みを始めてから、Ａ児への支援はこの手帳を通じた支援へ次々と移行していった。現在では、彼への支援の殆どはこの手帳のページにまとめている。彼から見ると、非常にわかりやすいようで、以前のような情報の混乱が明らかに少なくなっている。手帳への印象も良いようで、新しいページを手渡すと嬉しそうに綴じている。今後も続けて欲しいという彼の希望も言葉にしている。

彼の希望で課題別学習の中にパソコンの時間を取り入れている。パソコンなどの機器自身への興味からだけではなく、「自分もページを作りたいという」目的へ向かうための道具と感じることができている。今後の活用に期待できる方向性ではないだろうか。

のびのび手帳の取り組みは他の児童への支援へと広がり、それぞれの特性や課題に即した支援のページ作成や活用のノウハウができつつある。児童の活用も、「教師中心から自分で活用」へ徐々に移行していく方向性も見えてきた。手帳作りの手順を一つ一つ身につけてもらい、将来的には自己管理のツールとしての活用を目指したい。そのためにも今回の実践を個人的な取り組みに終わらせず、来年度以降も今年度の手法や成果を生かした実践を繋いでいってもらいたい。

情報整理や活用が苦手なＡ児にとって、この取り組みが、情報活用の基礎的な力を養う手助けになればと思う。